
悪魔の脚本『終末のカタストロフ』

有月 仮字

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の脚本『終末のカタストロフ』

【Nコード】

N4810BA

【作者名】

有月 仮字

【あらすじ】

滅びへの秒読みが始まった近未来。世界は音楽戦争の真っ直中にあった。

音楽は宗教となり歌は政治の道具となり他国侵略の足がかり。何の音楽にも関心の持てない青年は安息を求め自殺を図り、同じく飛び降り自殺を図ろうとしていた人気歌姫フォルテと出会う。

音楽集団『Barock』の歌姫であるフォルテとクラヴィーア。どっちかが女でどっちかが男という双子の歌姫。予め傷付けられていた柵の存在に彼女は弟（妹）？共々命を狙われていることを知り、

誰のファンでもないその青年を信頼しボディガードを頼み込む。二人を助けた縁でその使用人となった青年と世界の行く末は……？

目覚めれば確実に世界を滅ぼす悪魔の魂を持つ青年と……歌を綴った物語。

1：週初めのフライハイ（前書き）

時間軸的には『海神の歌姫』の後。

物語の悪魔が封印されてしまった後の話です。

社会風刺の側面が強い作品です。そういったことに抵抗のある方にはあまりお勧めできません。

1：週初めのフライハイ

「お嬢様、何を笑っているのですか？」

「馬鹿ね使い魔、これが嗤わずにいられるものですか」

私は嗤う。大いに彼らを嘲笑う。

「人間って本当、馬鹿みたい。馬鹿ばかり。とうとうこんな物まで宗教にしてみました。たらしいじゃない」

私は手招きし、本を使い魔にも見せてやる。

「歌を音楽の本質も解らぬ輩には過ぎた概念だったのよ、あははははっ！」

「これは……」

「この世界、終わったわね。まもなく滅ぶわ」

こういつ風に間違えた世界は例外なくそうだった。だからこれもそうだろう。私は心躍らせる。こればかりは悪魔の性。

「なら、この私が書き綴ってやるうじやない！どんな愉快な終わり方をしてくれるのかしら？ああ！胸が弾むわ！どんなに馬鹿な人間だって死に様くらいは愉快に踊ってくれるはずだもの！」

「と言いますよりお嬢様」

「何？」

「この本を観察されはじめて随分と経ちますよね？お嬢様はそうなるともっと前から知っていたのでは？」

「そりゃあ当然知ってるわよ！だってこの本の中には第二領主の魂が眠っているんだもの！とびつきりの舞台になるともう随分前か

から見守つてたに決まつてるじゃない！」

私の同僚、地獄の第二領主様。彼は本当にいい男。付き合いたくはないけどね。

それでも彼はいい男。

「だって彼が目覚めた世界は例外なく滅ぶじゃない？」

この度私、物語の悪魔イストリアが綴りますのは破滅と滅びの物語。終わるからこそ美しい物が世界には在るのだと、私に疑う余地などありません。嗚呼、人間って何て愚かで愛おしいのかしら。

*

街の中を歩いていて耳に飛び込む騒音がある。

僕はその雑音に耳を塞ぐ。それが喧嘩を買うのだと気付いてからは止めていた。代わりに僕が身につけるようになったのがヘッドフォン。それで耳を塞ぐだけでは完全に音は殺せない。僕が口ずさむようになったのは、聞こえる音を打ち消すため。耳に飛び込むそれを相殺するための音楽を僕の口は紡ぎ出す。

歌は人の心、人の魂とは何時代の時代の先人の言葉だったか。なるほどだからか。人は愚かで醜い、だから……歌もこんなに醜く愚かなものなのだ。

(ああ、気持ち悪いな)

気持ち悪い、気持ち悪い、気持ち悪い。

何時から人と歌の関係はこんなに汚らわしい物になってしまったんだろう。屋上に寝転んで目を瞑っていても聞こえる。声は歌とは違うから、会話まで僕は遮断できない。僕の声は一度に一つのこと

ごろんと惰眠に戻った僕に舌打ちを残し、クラスメイトらは消えていく。ああ、本当下らないな。死にたい。こんな人生。こんな世界下らない。一回滅べば良いんだよ。僕が神様ならきつとそうする。でも面倒臭いから僕はやらない。僕は別に神様なんかじゃないし。

それは別に最初は宗教などではなかったはずだ。それでも何処にでも熱心な信者もとい馬鹿は湧くもので。

歌姫と信者。アーティストと信者。数え上げたらキリがない。兎に角そういう関係性に目を付けた奴がいる。

何をとち狂ったのかそれが国のお偉いさん方。素晴らしい歌姫を作り出せばそれだけで、洗脳して洗脳して、世界を手に出来るという妄想に取り憑かれた。

だけどある程度人は馬鹿で、ある程度の人間はその洗脳に脳内ジヤック。そうなつてからはもう遅い。それに対抗すべく、余所の国もそういう妄想に飛び込んだ。

世界は今や、歌合戦。音楽戦争の真つ直中にある。核戦争なんかよりは余程平和だもつとやれとか思ってる奴もいるんだろうけど、それは危機感がない証拠だ。僕は余程核兵器の方がちゃんと目に見える恐怖である分有り難い。だけど歌はそうじゃない。パッケージ化されたり、TVにでもでない限り視覚情報にはならない。だから厄介だ。

泣き叫ぶ両親を踏みつけてテレビを打ち壊しゴミへと捨て家出をし、惰眠を貪るようになった僕の前にもこうして奴らの使者はやって来る。

歌は世界を救うだつて？ああ嗚呼、馬鹿みたい。実際馬鹿。歌は世界を滅ぼす。それが僕の見解だ。

そりゃあいいよね。信者が勝手に暴れたつて別にそれはそいつ自身の責任だ。明確にはそれは宗教ではないのだから誰かの責任、ましてや国の罪にはならない。音楽に国境はなく自由って話なんだから。

まず今僕が誘われたのが『Barock』^{ハロック}という音楽グループ。別名、過去からの使者。クラシカルな音楽で現代音楽を淘汰する。歌い手達の姿形は中世ヨーロッパを思わせるような出で立ち。教会とかとも仲が良く、ミサと称してライブを行う。

その演奏をするのはその道ではそれぞれ有名な演奏家ばかりで、そういう方面からのファンも多い。そんなプロの楽団を従えるのは二人の歌姫。人形のように愛らしい少年少女。金髪の子と銀髪の子。彼らは双子のきょうだいでどっちかが男だと言うが、どちらがどちらかは明言されていないため、共に歌姫と呼ばれる。こんな時代だ、今が嫌になる……そういう人の心の中にある懐古と憧れの心。それと性別を曖昧にすることでロリシヨタどっちか或いはどっちもいける変態共の性癖。それを上手く刺激したグループだ。

おまけにBarockのロックはrockのロックだと言わんばかりにそっち方面にも手を出して、梓に留まらない人気を持つ。中でもBarockは西欧方面での人気は高く、向こうの国は殆どその傘下に加わっている。街中から聞こえてくるメロディーに懐かしさを感じると同時に嫌悪感を感じる理由からは目を背けたい。

それに対を成すグループとしては東欧からの使者^{トロイ}『^カ』か。双子に対抗したのかこっちは三きょうだい。姉と弟と妹。

という幅広いストライクゾーンを狙い撃つ。これの何が恐ろしいかと言うと、三人で姉属性と兄属性と弟属性と妹属性全てをカバーしているということだとか別のクラスメイトが言っていた。人間少なからず最低そのどれか一つはヒットするのだとも。歌うのは民謡が主だが、軍服に身を包んだ子供というのは守ってあげたいと思わせたり、或いはその着せられてる感に悶えたり、ストイックなその出で立ちにときめいたりするものらしい。僕にはよく分からないが。それでも短調のメロディーは耳に残る。つい口ずさみそうになるくらいに強い印象はあると思う。

この二つが三強には入るらしい。あと一つは何だったかな。

ええと、『folklore』というグループ？いや違うな。こ

フォルクローレ

れは四番組くらいだったはず。これは言うなれば民族音楽連合。東西南北、世界中のあっちこっちから音楽戦争に乗り遅れた国が連携し、不可侵協定を定め国と文化を守るため発足、立ち上げた組織。それぞれの文化を尊重し、世界にその保護を発信していくとか聞こえは良いが、TVの出演での並び順だの、ジャケットのことだのなんだで熾烈な首位争いをしているとかで、内輪もめが酷い。

それでもCD一つで世界を旅したような気分になれるとか、様々な民族音楽に触れられると言うことでそれなりにファンはいる。F U加盟国間での格安旅行ツアーなども企画し、観光産業にも力を入れていそう、ファンクラブに入れば格安で旅行が出来るようになるとのことで、音楽戦争に関心の無かった層を一気に味方に引き込んだ。僕は旅行なんて面倒臭いことしたくないけど、そうじゃない人間の方が多いことくらい僕だって知っている。三強に迫る勢いだっっていうのは聞いた。

ええと、もうひとつは本気でなんだっけ？さっきなんか下の階で騒いでた奴がいたのが『大和と撫子』とかいうアイドルグループ。これは違う。一昨日上級生からイベントに誘われたけど眠いので断った。聞く話によるとボーイッシュな男装少女の大和と、お淑やかな美少女撫子のコンビでやってるアイドルで、歌はアイドルにしては上手い部類。それでも先に述べた連中の足下にも及ばない。唯お笑いコンビとしての才能はあるんだか無いんだか、TV局と政治家に親戚がいるとかいないとかでTVにはですっぱり。男装美少年で女性の心を掴み、美少女で男性の心を掴むというなかなかな戦法。洗脳が上手くいったのかこの国ではそこそこ人気がある。でも僕は金払ってまで歌を聞きたいとは思わない。そもそも僕の家にはTVがないから顔も良くわからないしそれで別に困っていない。

クロック

昨日誘われたのは確か『969メイカー』というロックバンドだった。男性グループだが女性だけではなく男性からもいい支持率を保っているなかなか優秀なバンドだ。だけどこれも違う。僕がアイ

ドルのイベントを断ったことで「うんうんあんなアイドルオタクとお前は違うと思っていたんだ。お前には見所がある。お前も男だな」と何か解ったような顔になった他のクラスの奴から誘われたけど、眠かったから断った。

うーん。あれは違う？ 『黒子田イル』？ 電子アイドル。非实在電脳アイドル。歌っているのは名無しの声優。表舞台に一切姿を現さず、キャラクターの陰に隠れる。そのキャラクター以外は一切演じないからパーソナルデータも殆ど外部に漏れない。正に実在しない歌姫一人を産み出すために、一人の人間の人生が潰されているのだから人身御供だよ。表に出ないからこそ不祥事もない。ファンを裏切らない。絵に描いたような美少女というか実際絵です本当にありがとうございます。アニメ化漫画化ゲーム化e t c …。三強からは程遠いが、もしかしたら今この国では一番勢力のある派閥？ あれは何時のことだったか。影の薄いクラスメイトと視線があっただけで「みなまで言うな」と言わんばかりににっと笑って鞆の中に得体の知れないCDを入られていたので、とりあえず面倒臭いが職員室に運んでおいた。僕も人のことは言えないが、少なくとも僕は授業中は寝ないぞ。学校は勉強に励むところだろう、関係ない物持ち込んだ奴が悪い。これに懲りてもう二度と僕に関わらないでくれればそれでいい。ぶひいいいい僕の女神があああとかいう叫き声はヘッドフォンで遮断しておいた。それにしても現代の偶像崇拜ここに極められたか。どっちがマシかはわからないが、僕の惰眠の害になるなら二でも三でも容赦はしない。

（ああ、そうだ）

頭の上を通り過ぎた飛行船を見て僕は思い出す。そして思い出したことを後悔していた。意図的に忘れようとしてたんだよ僕は。

その飛行船にでかでかと描かれたCM写真。TVを捨てた僕の前

にも現れるのだからこれ本当に何て言う嫌がらせ？

三強の最後の一つ。だが敢えてグループ名は読まんぞ僕は。何が何でも読むものかと目を瞑る。それはは東洋で人気のあるグループ……ということになっている。数字工作なんかお手の物。国上げて色々されたら僕のような一個人としてはどうしようもない。

それでも色気が違うのだよ色気がとか生足はあはあとか言ってるおっさん達からの支持は厚い。そんな性欲塗れの年長者の老後を支えるなんて真つ平だ。なんだか僕年金払わなくても良いような気がしてきた。だってその金で貢ぐんだろ？あー嫌だ嫌だ。年金払うくらいなら死にたい。死のうかな。でもどうせ死ぬくらいなら世のため人のために暗殺でも働いて死刑になった方がいいだろうか？どっちにしる面倒臭い。息するのも面倒くさい。もう人間の歴史も大分進んだからさそろそろ誰か痛くなくて楽に死ねる方法考案してくれても良いんじゃないかって僕は思うわけだよ。ていうか避妊しろ。そもそも生むな。僕なんか。

こうやって空を見上げて嗚呼死にたいなーと思うのは間違いだ。嗚呼、生まれたくなかったなーが正解だ。なんだってこんな時代に生まれたんだか。ろくでもない世界にろくでもない奴ら。何処か別のもつといい場所に生まれていたら僕だってこんなに無気力にはならなかっただろうさ。結論として世界が悪い。僕の労働修学意欲を損なわせる世界が悪い。よって僕は情眠を貪る。誰が何と言おうとここから一歩たりとも動かない。

だって僕なんか端数。僕一人がどうしようもどうしまいとどうしようもないものはどうしようもない。

幸い我が国の中枢はまだどのグループへも屈していない。この音楽戦争の最後の砦。この国が落ちた時、戦争は新たな局面へと向かうのだろう。

(でもどうせなー……)

国を守るために答えを先延ばしにしているんじゃないやなくて、国会でも派閥で割れてるんだろ？それで答えが出ないだけさ。音楽戦争の最後の皆は頼りがない。保身のために金のためにファンを演じているだけなのだ。いや、本当にとち狂ってる人もいるのかも知れないけどさ。うちの国出身の一押しアイドルって話の『大和と撫子』だってバックには他国の勢力が付いてるって話だ。

芸能人がどの音楽グループのファンかを公言し、そのファンをも飲み込んで拡大していく勢力。それが政治、国際問題にも絡んでいるとなればステマ乙では済まされない。……のだが、現状としてそれに気付いた人がいてもその四文字で済ませてしまっている辺り、やっぱりこの国はお終いだらう。

もはや音楽戦争は現代の宗教戦争と呼べる代物までなってきた。無神教なんですってどこまで逃げられるのだらうこの国は、僕は。

「……帰るかな」

僕はとぼとぼと、暗くなった夕暮れ……：帰りたくもない帰路に就く。

高校まで義務教育化した社会を僕は怨む。僕に葉緑体を与えなかった神を憎む。人間なんて面倒臭い。食わないと死ぬ。死ぬのは痛い。死なないためには食わないと。食うためには金が必要。しかし学生の就労時間は限られる。同じ仕事でも人の足元を見たような奴隷賃金。どんなに嫌いな親だってそのすねをかじらなければ生きていけないのが現状。

(……雑草って食えるかな)

「あの……大丈夫ですか？」

「え？」

突然声をかけられた。根暗な僕なんかには声をかけるのは宗教狂い

の布教活動者くらいなものだ。振り向けば普通にそこそこ可愛い女の子。今時珍しい綺麗な黒髪ストリート。でも確かにある種の層には合致するような女の子。ああ、なるほどまた布教か。最近じゃ女の子を出汁に使った布教活動も多い。

「このファンクラブに入って彼女が出来ました!」「父の病気が治りました!」「童貞捨てられました!」「金持ちになりました!」「就職できました!」とかな。なんかもう嫌だこの世界。

「何か用?布教活動なら余所でやってよ」

「いえ、そうではなくて。その花の根には毒がありますよ?自殺なんて早まったことはしちゃ駄目です」

「へえ」

この子は僕が自殺しようとして毒草を凝視していると思った訳か。脳味噌お花畑だなあ。当然全人類が満身に三食食えとんでも思っているのか。その前提で僕に話しかけてきている訳か。うわ、嫌だ嫌だ。関わりたくないな。

「え?ちよつと!?無視ですか!?え?...携帯?」

ピリリと鳴った着信音。彼女は開いて絶句する。

「僕は夕飯の物色の邪魔をするような子と話すことは何もない」

僕の携帯。彼女の携帯。映されたのは同じ文章。その絡繰りに取り乱した彼女。狼狽えている内に放置。そうしてまもなく、僕は誰もいない家に着く。

新聞受けにはアーティスト達のイベントの告知。派閥に分かれたお試し新聞。そして実家からの催促の手紙。留守電には夥しい数の

伝言メツセージ。それは”お母さんです”から始まる物と、”俺だ”から始まる物が大半で。僕の健康を気遣う声とか、学校であったことを尋ねる声なんか一つも入っていない。

”あのね、　　：　　ちゃんはおかしいと思うわ。お母さん恥ずかしいのよ。うちの団地で　　：　　様のファンクラブに入っていないの　　：　　ちゃんだけなのよ。お母さん恥ずかしくて外も歩けないの。お母さんのためにも、お母さんの言うこと聞いてよ！私の子供でしよう！？”

”無理強いはしたくなかったが　　：　　様の音楽に惚れないなんてお前はおかしい。その内精神科の先生に診て貰うから一度実家に帰って来なさい。お前を真つ当な人間に戻すのは父親として当然の責務だ。金は幾ら掛かっても気にしない。だから帰ってこい！今月以内に治療を受けなければ仕送りは止める。いいな！”

貸家の部屋に響く留守電。そのコードを引っこ抜いて壁へと打ち付けた。もう嫌だ。

両親は離婚した。理由は方向性の違いからだ。お前らは何処のバンドだと突っ込みを入れずにはいられない。

音楽って何？極々普通な家庭環境を引き裂く物？違つたろう？人を幸せにするものじゃないのか？それが音楽なら今世界に溢れている物は総じて唯の騒音だ！ああ、ああ！下らないっ！音楽なんて下らない！人の幸せに集る蛆虫共が。もうほつといてくれ。

僕はもう僕を止めたい。何処かへ行つてしまいたい。暗い部屋に靴をぶち込んで、そのまま街へと駆けだした。面倒臭いけど走つてやった。何処までもこのまま突っ走ればどこか違う世界へ逃げられるんじゃないかなんて馬鹿みたいな夢を見て、息を切らして僕は走った。何時しか涙が溢れていた。

そうして駆け上がった先。何処かのビルの最上階。そのまま飛び降りてやるうと思つて下を見た。すると何だかそこが騒がしい。

「五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅いっ！もううんざりよっ！私はお人形さんなんかじゃないっ！」

「ちよつと、落ち着いてよ！テレビが見てるんだよ！？」

「なによ何よ何よっ！あんたもそつちの味方なの！？あんただけは解つてくれると思つたのに！」

「いや、君の気持ちは僕だつてよく分かる。だけど………だけど僕らは、こんなことのために歌つてきたんじゃないだろう！？また昔みたい………だから僕らはっ！」

「でも、こんなの嫌！嬉しくないっ！楽しくないっ！こんなのあんなの歌じゃないっ！嫌嫌嫌嫌嫌っ！あんたもこつちに来なさいよ！私を一人にしないでっ！どうして止めるの！？一緒に死んでくれないの！？」

「………姉さん、僕は！歌が好きだ！姉さんが好きだ！だから一緒に歌いたい！今日も明日も明後日も！世界がどうだとか！そんなの僕にだつてわかんないよ！でも、僕は歌いたいんだ！姉さんっ！姉さんと一緒にいるためには、歌わないと………」

「それがおかしいのよ！なんで！？どうして！？一緒にいたいから一緒にいちゃ駄目なの！？おかしいよそんなの！」

見ればどうやら隣のビルに先客がいるらしい。フェンスを踏み越えたところで互いに目があった。こつちの方が高いビルだから、彼女が俺を見上げる形になった。

「何よあんた！私のファン！？止めに来たつて無駄よ！死んでやるんだからっ！」

「いや、ていうかあんた誰？」

「はあ！？私を知らないつて言うの！？あんた何処の未開の地の人間！？信じらんないっ！」

小柄な金髪の少女が何やら叫く。絵本の中から飛び出してきたようにその出で立ちに、もしかしてと思った。

「あ、Barockの歌姫か。Klavier^{クラヴィーア} = Schil^{シユリヒツ}? ss^{セル} e^ル1だっけ?」

「私はForte = Fl^{フォルテ}? ge^{フリューゲル}1っ! 私とあの子の名前間違えるなんてっ! 信じられないっ! 許せないっ! 絶対飛び下りてやるっ! 飛び下りてやるっ!」

「そうか。僕は別件で死にに來ただけだから気にしないでそっちはそっちで死んでくれて良いよ」

「そんなこと言わないで下さい! 今の姉さんはちょっとしたことで飛び下りかねないんですよ!?!」

そんなこと今正に飛び下りようとしている僕に言われても困る。銀髪の少年が泣きそうな声で頼み込んで来る。確かにこのまま死ぬのは目覚めが悪いが。

「って言ってるけどどうする? 死ぬのか? 止めた方が良いんじゃないのか?」

「うっさい! あんたに関係ないじゃない!」

「駄目だった」

「諦めるの早いですよ! もう……他人に頼った僕が馬鹿だった。姉さん! 今から行くからそこで待ってて!」

衆人環視をかいくぐり、少年はビルの中へと侵入したようだ。お、中々アクティブ。手にした傘で窓硝子割っていった。

「ねえ、あんたは何で死にたいの?」

風に掻き消されそうな程小さな細かい声。少女が僕にそう尋ねた

ように聞こえた。

「きゃっ！何でこっち来るのよ！」

「いや、下の奴ら五月蠅くて傍に来ないと声聞こえないし」

「うわ、痛そっ……」

「うん、痛いなこれ。この高さでもこれくらい痛いんだ。やっぱ飛び降り駄目、か」

数階分の高さでもばつちり受け身を取り損なつた僕はすしやあと落下。足の骨が折れている。嗚咽混じりに涙目になる僕を心配してかフェンスの向こうから顔を覗かせる少女。本当は優しい子なのかもしれない。

「君有名人だろ。安楽死の薬とか持つてる知り合いいたら紹介してくれない？」

「そんな知り合いいるなら私だつて紹介してほしいくらいよ」

「そうか。一瞬だけそう言うの貰えるならここで助けてお近づきになるうかと思つたけどやっぱり止めた」

「あんた、そんなに死にたいの？」

「だつてつまらないだろこの時代。死にたくもなるさ」

「そんな理由で？」

「まあ、でもどうしても死にたいって言うならお供してあげるよ。僕は別に君のファンじゃないけど」

「……変な奴。私がどうして死にたいか聞かないの？」

「聞かれたそんな顔してるから聞かない」

「何それ！」

少女が初めて笑つた。初めてその子を可愛いと思つた。街角で見るポスターやテレビの中では一度もそうは思わなかつたのに。

「きょうだいで苗字が違うって言うのは、離婚したんだろ。君の家も」

「ファンでもない癖に、変なことだけ知ってるのね。そういう設定だとは思わないの？本当はあの子も私も他人。顔が似てるからユニット組まされただけとか、離婚なんてお涙頂戴の舞台背景だとか」

「それならあの子はこんな高いビルを昇ってなんか来るもんか」

「……そうね。そうかもしれない」

「君はいいなあ。僕はここより三階分は高いビルまで昇った。それはつまり三階分猶予があった。だけど僕を止めに来る人は誰もいなかった」

「何が言いたいのか？」

何のつもりかと聞かれたが、僕は純粹に彼ら二人が羨ましかつた。だって彼女にはきょうだいがいて。その子はあの小さな身体で懸命にこの高いビルをのぼろうとしているんだ。誰に命令されたでもないのに。

「君は三階分僕より時間がなかった。それなのに君を追ってきた奴がいる。なのに君はまだ死のうとしている。死の何がそこまで君を惹き付けるのか少し気になっただけさ」

恵まれているんじゃないのか？偶像の自分が嫌になったと聞こえたが、まだ彼女にとつての世界に光はあるのではないか。僕はそれを尋ねた。それに返って来たのは……

「Flower? ……意味は知ってる？」

「鳥の翼。グランドピアノのことだった？」

「ええ、そうよ。そして私の名前……」

少女は柵に手をかけながら、暗い都会の夜空を見上げる。そして

自嘲気味に笑う。

「嫌になったのよ。この名前が。だって私は飛べやしない。全然自由じゃない」

「歌いたかつたんじゃないのか？」

「歌は好きよ。だけどこんな風になりたかつたんじゃない。こんな苦しいものを、歌だなんて私は呼びたくない」

幾つもの国を、人の命を預けられた。小さな身体が震える。彼女たちが音楽戦争に負ければどうなるかなんて、僕には解らない。

「あのね、私にはそっち側が鳥籠に見えるの。この柵の向こうに憧れた。ここが本当の空……」

「君は凄いな」

「……何よ、突然」

「今、何歳だっけ？」

「12……今年で13」

「そっか僕は今年で16だ」

別に馬鹿にしている訳じゃない。僕は本当に感心していたんだよ。

「君は僕より若いのに、僕より早くこの世界を見限った。自殺するなんて勇気を僕より早く持つことが出来た。それは凄いことだ。誇って良い」

「な、何……それ」

「僕は怖い。死にたいけど本当に怖い。痛いのは嫌だ。だって痛いのは苦しいだろ。だからこうやって今まで生きて来てしまった。踏ん切りが付かなくて、今だっけ見てくれ。手が震えてる。だから君に便乗しようとしているんだ」

「便乗？」

「うん。だから君が死ぬなら僕も死ぬ。旅は道連れ世は情け。ここで会ったも何かの縁だ。どうせ死ぬなら一緒に死のう！その方が怖くないかもしれない！」

「あんた……本当、馬鹿みたい。良くも知らない私のために。フアンでもない癖に、一緒に死んでくれるって言うの？」

「今なら土下座しても良い。君が死ぬ気なら是非とも一緒にさせてくれ」

「……嫌よ」

「そこを何卒っ！」

「私みたいな超有名人と一緒に死ぬ男がそんな草臥れた学生服なんて嫌！もう少し見られる格好にしてよ！変な噂立てられたら残されたあの子がどんな目に遭うかわかったもんじゃない！」

「そっか。じゃあ、はい」

「え？」

「着替えてくるから。どんな服が良いのか一緒に選んで。じゃなきゃ一緒に死ねないだろ？」

「……………ふん」

今日の所は止めておこうよ。そう言って伸ばした手。柵の向こう側から少女が掴んでくれた。

「姉さんっ！」

屋上のドアが開かれる。駆け込んでくる少年の姿。それが倒れ込むように揺らぐ？

（あ、逆だ）

僕らが倒れ込むように、落下している。柵が壊れたんだ。余所見をした瞬間に。それで僕と彼女ごと、真っ逆さまに落ちていく。

(馬鹿 ああああああああ！あんだ男でしょ！踏ん張りなさいよおおおお！！)

(声出すな。舌噛むぞ)

(何でそんなに冷静なのよあんだわあああ！！)

(そんなこと言われても)

とりあえず彼女を抱いて庇いつつ、目でそんなことを会話する。やっぱりあそこで体勢崩さなかったとしても万年昼寝部の僕に、女の子一人抱えられる体力はなかっただろう。

僕は片手でポケットからティッシュを取り出し両耳にそれを詰め。彼女にもそれをした後、耳元で聞こえるように言葉を紡ぐ。

「君、俺が腕に力を込めたら耳を塞ぐんだ。いいね」

「え？……」

「いや、もう塞いでおいて」

「……」

小さく彼女が頷く。それを見て僕は微笑む。

この子にはちゃんと家族がいる。見た感じ良い子そうだな。ならこの子はまだ死んじゃいけない。ああ、そうそう。そうでなくとも痛いのは嫌だ。よく考えたら彼女と僕の体重分、落下の際の衝撃は増す。つまりその分痛い。それは嫌だ。

よく分からないでいる少女に指示をして、僕は衝撃に備え大きく息を吸う。落下の際に衝撃があるならそれを和らげる位の声が出せれば、僕らは死なずに済むかもしれない。

真っ直ぐ見据えた先。次第に大きくなっていく標的。出来ないとは思わなかった。不思議なことだけど、何も怖くなかった。それは当たり前のように出来てしまつと信じられた。

「
」
耳を塞がなかった地上の人々は、すっかり気絶している。

「よいしょつと」

とりあえずポケットから携帯を取り出し、辺りにウイルスを蔓延。片っ端から撮影機材のデータを壊す。最近のビデオは無意味にネット環境が整っているからいけない。撮影データを機材ではなくそのままPCに飛ばそうってことらしいけど、そのPCの方までおじやんにさせておいたから問題はない。

「データはこれで全部壊した。これで今日の一件は無かったことになる。良かったね」

「あ、あなたなんなの!？」

「肺活量には自信があるんだ」

「そ、そういうレベルの話なの!？これっ!」

「いや、ハッカーになつたらやば目の取引とかに加われて安楽死の薬分けて貰えるかと思つた時期があつて」

「あなたねえ……」

呆れたように溜息を吐く歌姫。

「それにしても良くあんな高さから無事で……」

「無事でもないよ。俺の片足着地のあれで完全に駄目だわこれ」

彼女が空を見上げる。釣られて僕も上を見る。何かが見えた。それは落ちてくる柵と銀髪の少年。

片足でケンケンしながら距離を置いた俺を見て、少女は変な声を出す。言われてみれば僕は何処へ帰ればよいのだろうか？僕は少しばかり考え込んだ。すぐに答えは見えた。

「段ボール」

「え？」

「ホームレスになろうと思うんだ」

「はい？」

きょうだい揃って変な声を出している。目を瞬く様は片方だけ可愛い。金髪の方は僕を馬鹿にしているような顔に見えたのであまり可愛くはない。なるほど、今の言い方では誤解を生んでしまったか。

「ええとそういう住所はないよ？ただ……家出して来たし、まず段ボールを拾ってきて。公園に行こうかな。そこでどうやったら野犬と一緒に保健所に連れて行って貰えて安楽死させて貰えるかを考えようと思う」

「真顔で止めてっ！そんな格好のままういなくなられても困るのっ！お金ならあるわ。せめて病院に行くくらいの世話はさせなさい！」

「お兄さん、貴方は僕らの命の恩人です。僕らに何か出来ることがあるなら何でも仰って下さい」

「それじゃあ……段ボール探しを手伝ってくれないか？それとガムテープ」

「だから有名人の私らに下らないことさせるなっ！もうちょいマシな寝床提供してやるっ！あんたの周辺落ち着くまで匿ってやるわよこんちくしょうっ！」

「いや、見ず知らずの他人にそんなことまでさせられない。俺は段ボールを捜しに行く」

「止めなさいよ本当っ！お願いだからっ！」

少女に抱き付かれて、その重みに足が軋む。痛い。それを抗議する前に、彼女が僕にだけ聞こえる大きさを呟いた。

（嘔吐き。一緒に死んでくれるって言った癖に）

（あ）

そうだ。そう言えばそうだった。僕の行方が解らなくなれば、彼女がまた死にたくなつた時に困るのだらう。確かに約束はした。した以上それに従わなければならぬか。

（参ったな……）

僕には一つ、厄介な癖がある。それは約束だ。

どうという体質か解らないが、僕は一度約束したことだけは絶対に破れない。自分の意思に反してもそれに従わなければならなくなる。だからこそ、僕はノーと言える現代人。嫌なことは嫌だと言いつつ常に眠いと言って逃げる。

飛び降りの痛みで目が覚めて、久しぶりにうっかりちゃんと会話をしてしまったのが間違いだった。ちゃんと携帯で打ち込んで、それが約束になっていないかどうかを確かめる必要があつたのに。

「解つた。降参だ。煮るなり焼くなり好きにしてくれ」

「……本当？」

「約束は絶対だ。約束した以上、僕は君に従う」

「……そういえば、あんた名前は？」

「……ウエルメイド」

「well-made？」

「だから僕には中身がない。つまらない人間さ」

「あんたどう見てもその黒髪黒目……カタカナ名乗るような人間に見えないんだけど！絶対あんたこの国の人間でしょ！佐藤とか高橋とか鈴木とかその辺の名前でしょ！」

「姉さん！この人と全国全世界の佐藤さんと高橋さんと鈴木さんに失礼だよそんな言い方したら」

ああ、メジャーな苗字しか知らないのか。いや、外国の人間の苗字に熟知してる方がおかしいか。

「誤解しないで欲しい。ウエルメイドっていうのは外国風に言うただけでこつち風に言つと冥土飢得。冥土が苗字で飢得が名前だ」

「めいどうえる？めいどうえとくつてそんな物騒な名前付ける親がいるもんですかっ！」

「残念ながらこの腐つた世の中、いるんだよ。なんちゃらネームつてやつ。死にたくもなるだろ？」

「さもその通りですつて同意求めるような顔しないでよ！何なのそれっ！もうっ！……本名話す気がないつてわけね。いいわ。よおくわかった！このメイド野郎っ！女中野郎！もしくはアンフェール！ヘル公！あんたなんかそれで十分よ！」

「ウエルさん？つて言うんですか？助けて下さつてありがとうございます。乗ります。お礼はまた改めて……とりあえず車を用意しました。乗つて下さい。歩けますか？僕に掴まって……」

「（こんなのに騙されるなんて）君、可愛いな」

「え？」

「だからなんでシュリーばっか口説くのよあんたはっ！腹立つっ！私の方が可愛いじゃない！」

「いや、同じ顔だろ」

「そこを真顔で言うなっ！！」

*

あんな無気力な男に恋愛なんか出来る物でしょうか？俺には想像できません。

「あら？あなたの飼い主様はそういう展開大歓迎じゃなかった？私としては炊事の美味しい使い魔を派遣して貰ってるお礼に第二領地くらい、くれてやっても構わないのよ？返事は？」

「御主も悪よのう……実はここだけの話、愛してるよ子猫ちゃん”だそつです」

「あら？奴のことならその後“どうせなら一発お兄さんと遊ばない？男体化してシヨタになってくれればもつと良し”とか言っただけでなかった？」

「言っただけでカットしました。大体お嬢様は今弱体化しています。完結してない本の中には入れません。そして一つの世界で一人としか契約できなくなっています」

「わかってるわよ。だから誰と契約するか、厳選してる最中なのよ。それはともかくどつちが男か解らない双子との三角関係って良くない？青年とロリ。青年とシヨタ。どつちも美味しい組み合わせじゃない！しかもあいつら毎日性別入れ替わりで女装男装してるのよ！？役者ねまったく、愛してるっ！」

愛してもきつちり死なせる前提の話をしているからやっぱりこの人もきつちり悪魔なんだなあ。いつそ惚れ惚れするほどに。

「お嬢様が教会陣営選んだ理由がよく分かりました。唯の趣味ですね。宗教音楽って我々悪魔にとっては騒音みたいなものなのに」

「真のDSは時にMも兼ねるのよ使い魔。より相手を虐げるための道筋ならば、私は多少の苦痛も厭わないっ！」

「あ、そつですか」

「見てなさい！私の趣味をかつてどうでもいいと言い捨てたっ、

貴方をロリシヨタ萌えに目覚めさせてやるわ第二公っ！」

お嬢様の高笑い。楽しそうで何よりです。

(しかし……)

覗き込んだ本の中。相変わらず無気力そうな目をした青年。

「哀れなものですね、貴方も」

頭の中で響いた。主の言葉を。なぞるように俺もまた繰り返す。何度死に、何度繰り返せば……彼の魂は夢を見なくなるのでしょうか？

(何処の時代に生まれたって……)

多分あの人の空虚を満たせる相手など、何処にもいやしないのだ。人の世は常に愚かで、常に無常だ。人は悪魔を救わない。悪魔が人を救っても、人は悪魔を救わない。それを知らない貴方でもないでしょうに。

「使い魔っ！夕飯の仕度をなさい！あの男の転落劇をにたにた笑って観察しようじゃないの！」

「お嬢様。彼もう既にどん底じゃないですか？」

“こんなに広い部屋、僕が使っているの？ありがとう……それじゃあ段ボールを拾って来”

“だから普通に住めっ！”

本の中で黒髪の青年が、金髪少女に叩かれていた。

それを見たお嬢様が椅子から転げ落ちるほど大笑い。咳き込むその背中をさすり、俺はこっそり息を吐いた。

この本完結したらイストリア様、他の領主様方誘ってホームパーティでも開きそう。一時休戦って形で。それでこの段ボール劇場を繰り返すんだろう。可哀想なくらいに。

1：週初めのフライハイ（後書き）

『時間泥棒』も『海神の歌姫』も歌がテーマ。

でも、何か違うな。今の世の中見てて純粹に歌についてを小説に出来ない。

そんな憤りをぶつけた作品です。

歌は政治の道具じゃないし、歌歌いは神様でもないし、音楽は宗教なんかじゃないはずだ。

歌を歌として好き。歌手を歌手として好き。それ以上の感情がない。その人がどんな人でもどうでも良いし、私生活に興味がないし、CDの音楽で満足して実際にいたいとも思わない。

でもそれを話すとそれっておかしい。まるで異端審問。唯好きなかっけじゃ駄目なんですか？それって音楽としておかしくないかい？

同じ人間を崇める気が起きないのがファン失格。そういうのはどうかと思うな。

無神論者の多い国って言いますが、あっちこっちでいるんな人が神神言われてるのをみると、なんだか微妙な気分になるんです。

ならそういう気持ちを利用されたら、音楽戦争っていう侵略もはじまるんじゃないか？本人達は血を流さない。だけどファン同士が血を流す。そんな戦争が始まらないことをここに願って。

2：夕暮れ夜へのストリート

昔々のお話です。

ある時ある世界のある場所に、一人の少年がおりました。

彼は疑問を抱えてしました。

それは簡潔な謎。何故自分が生まれここに生きているのか。

彼は人に生まれるには些か変人、そして余りに優しすぎた。そんな彼は悩みました。

日々生きる糧は命。何かを食らわねば生きてもいけない自分が生きてしまっている意味は何かと神に問う。

誰かの命を裏つてまで生きているのだ。きっと自分には何かなさねばならないことがあり、そのために生かされているのだと彼は信じる。そうしなければ彼は自分の生を肯定することも出来なかったのです。

そうして日々食し、命を奪い、生きていた。彼は日々嘆き悲しみ、涙しない日は一日たりともなかったそうです。

そんな彼はある日死にます。意味もなく、何をなすでもなく、何も変えられぬままに。

彼は最期にも涙しました。これまでの生に意味などなく、彼の人生、命にも何の役目もなく、意味などなかったのだと知って。これまで犠牲にしてきた全ての糧への心からの後悔。ああ、もし自分もっと早くそれに気付いていたのなら。例え神の教えに背いてでも自ら地獄に落ちる覚悟で自分を殺せていたのなら、一体どれ程の罪無き命が今日ここに、存在することが出来ていただろうか。

そして神の定めたシステムにより、彼の抱える罪の意識が優しき彼の魂を地獄へと引き摺り込みました。誰より優しいその人は悪魔

として生まれ変わり、日々嘆き続けています。現の醜い争いを彼は厭い、せめて美しい夢が見たいと遠い世界に思いを馳せて。

「あ、ティモ」

「げ、エングリマ」

悪魔の屋敷で出会した、空色の髪の少女のような少年と海色の髪の少年のような少女。

第二領主の身の回りの世話をしているのは罪と罰の双子の悪魔。夢の領地を持たない二人は現の領地の門から先は進めません。それでも長らく領地を不在にしているその悪魔のために、屋敷の管理をしているのです。

「ふん、こんな所で点数稼ぎい？第二領主に気に入られてこの領地を譲り受けようだなんてそうはさせないんだから！」

「だから僕はそんなつもりじゃない。僕は僕の領地だけで満足してる。権力争いに興味はないっていつつも言ってるじゃないか。掃除をしに来ただけだよ」

「はん、どうだか。私より少し領主の地位が上だからって調子乗ってんじゃねーぞ！」

「静かにしてよティモリア。あの人は寝ているんだから」

「くっそ。どうせ寝るなら現で寝ろっての。寝首搔けやしないじゃない」

「だから夢の領地で眠ってらっしゃるんだよ」

悪魔の世界でも争いは溢れている。そんな日々が続く限り、この屋敷は空のままなのだろうと少年悪魔は嘆息をします。

「カタスト口様。せめて今度は良い世界に巡り会っていると良いんだけど」

＊

「……一体全体これはどうしたの？」

「何処で盗聴されているかも解らない。ここが一番狭い。だから何かを仕掛ける場所も一番少ないはず。そう考えたんです」

「そりゃあそうかもしれないけどシユリー……だからってクロ―ゼツトに人間三人も入れれば狭いわよ」

「我慢して姉さん」

「つてあんたはどうしてそこで寝てるの！？起きなさいっ！」

「僕は一日12時間睡眠はしないと明日への活力を補えない体質なんだ」

「繊細なんですね」

「唯のぐーたらでしょ！」

金髪の歌姫に殴られて、僕は欠伸ながらに目を擦る。

「ふああ……ええとシユリー君？」

「は、はい！」

「その床下。盗聴器がある。それからその壁の間にカメラがある。情報書き換えて別の部屋のカメラと盗聴器と回線繋いでおいた。しばらくはバレないはずだけど、ここにも長居は出来ない。壊したらすぐにバレるから、向こうにバレるまで壊れないようにプログラム組んでおいた。こっちも時間の問題だろうな」

「ええええええ！？そ、それじゃあトイレとかでお話ししましょう
！」

「いや、普通に風呂場とトイレと寝室が盗撮盗聴スポットだった。内通者がいるのかスキャンダル狙いの敵かは知らないけどさ。難儀な商売なんだな有名人っていうのも」

「くそっ！私ら性別が明るみに出たら大変よ！？どっちがどっち

かわからない、あやふやな感じで人気保ってるんだもん！妄想の余地を残す所に意味があるのにつ！」

「うとう、だよね姉さん！世の中には僕らどっちも女の子だとかどっちも男の子だとかそういう脳内妄想してる人達だっているんだから！」

「本当、大変なんだなあ」

他人事のように呟くと、姉？は睨んで、弟？は涙目で僕を見る。

「大丈夫よシュリー！お風呂に入る時も私ら女巻きにして上も下も隠してたでしょ！？胸だってお互いそんなにかかわからない！下着は二人とも女物で統一してたし問題ないっ！」

別の意味で問題だと思うけど放っておくか。

「まあ、今ハッキングした所によると取り付けられたのはつい最近だね」

「ここのところ、この部屋は仕事で空けてたし……その間に？」

「多分ね。だからまだ危ないものは撮られていないよきつと」

僕がそう言えば、二人はほっと息を吐く。

「そうよね、ここのセキュリティを破ってそんな簡単には掛けるられないわよ」

「……だと思っただけだ」

この建物に入るにはそれなりに面倒な手続きがあった。部外者に破るのは困難だと思う。

「最近何か変わったことは無かった？マネージャーが変わったと

か、新しい付き人が来たとか」

「……姉さん、心当たりある？」

「……それはないけど、金でも積まれたのかしら。参ったわね。身内の人間信頼できないって言うのは痛いわよ。くそっ！ちよっと社長とボスに文句言ってくるっ！」

ズカズカと電話のある隣室に向かった金髪少女を見送り彼女が受話器を取る。付近の盗聴器具はそのタイミングで壊しておいた。僕が携帯を弄って一仕事終えたところで銀髪少年が僕の方へと近付いた。

「お兄さん……いえ、ウエルさんはこういった機械的なことに詳しいんですよね？」

「まあ、一応」

「それなら、お願いがあるんです」

「お願い？」

「貴方の衣食住を保証します。だから僕と姉さんを守ってくれませんか？」

それは有り難い申し出だ。住処を提供して貰った以上、確かに何らかの礼は面倒臭いけれどしなければならぬが、ボディガードなんて僕の得意分野からは程遠い。

「守る？いや、僕弱いしそんなの無理無理」

「身内の人間が信用できない今、使用人の皆さんは左遷するか解雇するしかないんです。新しく雇った人間が敵の内通者かどうかもわからない。貴方みたいな人が今、僕たちには必要なんです」

「……そんなこと言われても」

この銀髪の子の方はなんだか無下に出来ない。妙な既視感さえ感

じる。別にファンでも何でもないが、よしよしと頭を撫でてやりたくなるような愛嬌が彼？にはあった。

「いえ、身体の方は僕ら自身で守ります。ただどああいう機械的な分野は僕らじゃ太刀打ち出来ない。それに姉さん……姉さんを思い留まらせてくれた貴方なら、姉さんの……僕らの心を守ってくれるんじゃないかって」

その言葉に強く、惹き付けられるような気がした。そんな風にこんな僕を誰かに必要とされる日を、まるで僕は待っていたかのように、身体の震えが止まらない。

「……あのビルの道路側に面した柵その全て、寄り掛ければ壊れるようになっていたんです。昔から僕らの世話をしてくれた……本当に信頼できる人に確かめてきて貰いました」

「僕が手をついた柵は姉さんがいた柵の隣。仮にその情報が嘘だとしても少なくともあの二つは傷付けられていた。それは確かです」

確かにあの柵二つは屋上に出て真っ先に入場場所。わざわざ違う方向に向かうとも考えづらい。まして相手は子供。下で「早まるな」という声が聞こえれば、その方向へと向かうはず。誘導されていたと考えられないこともない。

「姉さんは自殺をするような人じゃない。多分僕が知らないだけで、誰かに酷いことをされたんだと思うんです」

「君……」

「僕は子供で……弱いから。姉さんは僕に頼ってくれない。全部を話してくれないっ。周りの人も僕を馬鹿にしているんです。姉さんがいなくなったら僕なんか何も残らない。一人じゃ歌えもしない

っ！だから姉さんを潰せば恐るるに足りないっ！そう思われているっ！実際そうだっ！でも、だからって！姉さんばかり苦しめられるのは、嫌なんです！」

……でも一番嫌なのは、何も出来ない自分。彼はそんな顔をしている。

それは衝動のように、湧き上がる感情だ。僕もそれを知っている。まるで自分を見ているようで不思議な気分。自分も他人もどうでも良いと思いつけていた僕が初めて……純粹にこの子を守りたいと思つた。

だってこの子の気持ちは誰にも解らない。僕の気持ちは誰にも解らなかったように。それならこの子はこの子だけは解ってくれるんじゃないのか？僕がこんなにもこの子のことが解るように。

「ウエル、さん？」

「いいんだ。もう……もう、良いんだ。守るよ僕が。だから泣かなくて良い」

思わず抱き締めてしまったのは、鏡を見ているような気持ちから抜け出したかったから？それとももっと近くにこの子を感じたかったから？

「いいわけあるかっ！泣かせるな！」

思い切り背中を蹴られた。笑わないと可愛くない方の子だ。

「人が電話しているうちに何してんの！うちの子に手を出して見なさいっ！ボスにお願いして闇に葬らせるわよ！」

流石は三強の一つの歌姫。裏世界との繋がりもやっぱりあるんじ

やないか。

「姉さん、ウエルさんが僕らの世話をしてくれるって」

「は？」

「盗聴とか盗撮対策は彼がいれば安心できるよ」

「確かにこいつ、私とセキュリーの名前間違えるわ私の顔見て私と解らなかつたりするわ……他の陣営に荷担しているようには見えないわね」

最初は嫌そうな顔をしていたフォルテも次第に頷き黙り込む。

「つて、時間よセキュリー！着替えないと！」

「うわ！もうそんな時間？」

「何するんだ？」

「あんたは出て行って！着替えないと行けないの！」

「なるほど。ならこの部屋のは破壊するか。えいつ」

盗聴盗撮器具を破壊し扉の外へと出ると、部屋の中から微妙な不満が聞こえてくる。

「な、何よあれ。少しは残念がりなさいよ！世紀の大人気歌姫の着替えなのよ！？」

「ウエルさんって紳士だね。凄い信頼できるよね！」

双子と言っても正反対の反応だった。そんな声が続いて数分後……扉が開いた。そこにはふて腐れたような少年と、微笑を浮かべた少女。

「ウエルさん、見張りありがとう」

「……おい、このシュリーを見て何か言つこと無いのかよ。お前それでも男か？」

部屋の中から現れたのは銀髪の少女と金髪の少年。ああ、入れ代わったのか。暗さで気付かず一瞬何事かと思つたが、髪の色は違つた。

「日替わり性別交代制なんだよ俺達は。さっきまでが姉弟、今からが兄妹。一度で二度美味しいんだぜ？」

すっかり男口調になつたフォルテが言う。

「一昨日ぶりのスカート！えへへ！」

シュリーは嬉しそうにくるくる回る。

「……こっちはこっちでも可愛いのに」

「うるせえっ！俺も俺でかなり人気はあるんだよっ！」

兄妹比べて溜息を吐けば、弟になつたフォルテに睨まれる。ああ、確かに。少年の姿の方が彼？はしつくり来る。いるよなこつという男の子。やんちゃ坊主、近所の悪ガキ。でも外見だけは美少年。好きな人は好きかもしれない。

「そうだね。フォルテも元気いっばいって感じで微笑ましいよ」

「可愛いって言え！馬鹿っ！」

「え？」

「つーか何でシュリーだけ名前で俺は苗字なんだよ」

「え？」

「だから俺の苗字がフォルテっ！名前がフリーユージェルだって言っ

てるだろ!？」

「あ、そうなんだ」

言われてみれば鳥の翼が名前だと言っていた。

「あれはこの国風に明記して上下逆にしてるんだよ。郷に入つては郷に従えって。ファンじゃねーなら知らなくても無理ねーけど…」

「なるほど。そうやってファンとファンじゃない奴見分けてたのか」

感心する僕にシュリーはにこりと微笑み、兄?を指さしリユールだよと教えてくれた。

「リユール?」

「リユールだどっちも呼べる愛称になっちゃうから私はシュリー。リユール兄さんがフリーユージャ嫌だつて言うんだもん」

「シュリーはセンスがないんだよ。フリーユードのゲルゲルだの」「それは兄さんが私をシュリユーとかセルセルとか言うからだよ!兄さんだつてセンスないじゃない!リユールのファンクラブはゲルマニアとか呼ばれてるからゲルゲルはそこから取つたんだよ!」「な、なんだよ!お前のファンクラブだつて“シュリーちゃんのだ錠前に鍵を刺し挿れ隊”とか気持ち悪い名称じゃねえか!」

「それはこの国がおかしいんだよ!他の国だとちゃんと普通にシュリーファンクラブだもんっ!」

「わかった。この国の腐敗具合の責任を取って僕が死ぬことにしよう」

「待てっらっ!」

リユールに手にした交ぜるな危険洗剤を叩き落とされた。

「何をするんだ」

「てめえが何してんだ！人様の家の薬品持ち出して危ないことするな！俺とお前はどうでもいいが、俺の可愛い妹が巻き込まれたらどうしてくれるんだ！」

「それもそうか、ごめん、悪かった」

「ふん、解ればいいんだ。……って少しは俺のことも気遣え馬鹿野郎っ！お前それでも俺達の使用人か！？」

「使用人？ボディガード……いやメンタルガード兼ホームセキユリテイの間違いじゃないかい？」

「黙れ家政夫。衣食住保証してやるんだからお前は俺のことも気遣うのが当然なんだよ」

「そうなの？」

「そうねの兄さん？」

「俺がそうだって言ったらそうなんだ！」

僕からシュリー。シュリーからリユールへと向かう視線リレー。

「仕方ない、解ったよフォルテ」

「解つてねえじゃねえか！」

「君たちみたいなの名人をいきなり愛称で呼んでたら怪しいだろ？しばらくは苗字呼びが無難だろう。シュリーの苗字は長いな……」

ピアノで良い？いや、面倒臭いな。シュリーはシュリーで良いか」

「良くねえよ！俺の妹簡単に名前呼びしてんじゃねえよ！」

「え？さっきまで大丈夫だったじゃないか」

「お前さ、唯単に俺の愛称発音しづらいつて言うので逃げてるだろ！」

「仕方ないだろ、この国の人間は概してラ行が苦手なんだ。LとRの区別があまり出来ていない。僕もそうだ。シュリーはなんとか発音できてもリユールは言い辛い。ルールじゃ駄目？」

「お前それでも年上か!?俺達はお前より年下なのにこんなに流暢にお前の国の言葉も喋ってるんだぜ!?」

「言われてみれば確かに。凄いな」

フォルテに言われて気が付いた。確かにそれは凄い。こんなに小さな子が流暢にこの国の言葉を喋っているなんて。

「伊達に歌姫やってないんだよ俺達は」

「政治の駒ですから。基本的に侵略する国の言語は覚えます。傘下に入ってくれた国の言葉も覚えます。愛を語るにはその人の国の言葉で。上から目線の愛してるなんて人の心に響かない。だから精一杯の愛を込めて、その言葉を愛す。同じ所に立って同じ目線で歌うこと。それが私達に出来る、せめてもの礼儀です」

「なるほど」

やっぱりこの子達もこの国を侵略に来た使者なんだなと改めてそう思った。だけど嫌悪感は不思議と無かった。ぼんやり二人を眺める僕に、シユリーがくすと笑みを溢す。

「ウエルさん……貴方は不思議な人ですね」

「え?」

「だって私達は敵国の人間です。それに私達の背後はどんな組織かも解らない。それなのに……私達に親切にしてくれる」

「そんなんじゃないよ」

別に縋れるだけの未練がこの国の中にないんだ。

どうせ奪われるだけなら、徹底的に破壊された方がまだマシだ。この国の歴史も文化もこの数百年で塗り替えられた。売り飛ばされて売られてしまった。今は偽りの歴史の中を生きている。それを叫いたところで世界はこの国は変わらない。音楽戦争なんてものに

の明日を託してしまった。

「本当にそれが愛する価値のある自分たちの文化なら、趣味じゃなくても僕だって応援したかもしれない。だけど違うんだよ」

もう既にこの国の楽器は歴史に葬られた。起源も奪われた。何も残らない。歌ってはいけない歌ばかりが増えていく。子供の頃に親しんだ童謡さえ他国に権利を奪われて、自由に口ずさむのが罪になる。新しく与えられた歌詞は僕らの知らない物。他国を讃える歌に返られていた。間違った歌詞を歌えば罪になる。それが著作権を侵害しているんだってさ。著作権は今では100年まで引き延ばされて、それが終わってから新しいアーティストが権利を金で買う。歌から自由が奪われて、ちょっと口ずさむ子守歌にまで著作権を徴収に来る奴らがいる。派閥に入らなければ自由に歌も歌えないらしい。他の派閥の人間は馬鹿高い金を払わないと、異国の歌も歌えないのが今の世界なんだってさ。

「もうこの国には守る価値のある物も、者もない。奴らに奪われるくらいなら、君たちに壊された方がまだ良いんじゃないかって思っただけだ」

「なんで、そんなこと……」

「だって君達は歌が好きなんだろ？それなら金のために歌ってる奴らより十分立派な歌姫だ。その背景がどんなものだって、少なくとも君たちは立派な歌姫だ。僕はそう思う」

フォルテの金色の髪に触れれば、彼は涙ぐんで目を逸らす。

「ウエルお兄ちゃん……」

背中から抱き付いてくるのはシュリー。僕に背を向けるのはフォ

ルテ。シュリーの涙は僕の背中に染みこむが、フォルテのそれは頭振った彼の動作で誰にも拭われないまま床へと落ちた。僕と彼の距離がもう少し近かったなら、僕の手は届いただろうか？今更のよ
うに考えた。

「シュリー、下らないことやってる場合じゃねえ！イベントが始まる！下に車が来てる頃だ！」

「うわ！大変！」

「ぼさつとしてんな！お前も来い！」

「え、面倒臭い。俺は段ボールの組み立てが」

「来ないと焼却処分する！俺様の権力でこの世の段ボールという名の段ボール全てを」

「それは困る。僕がここを追い出されたときのためにも段ボールは必要だ、よし、行こう」

すつくと立ち上がった僕にフォルテは首から引っ提げるケースに入ったカードキーを投げってくる。

「これ持つてる。関係者としていゝんな場所に行けるようになる」

受け取り損ねると、それを拾ったフォルテが俺に近付く。それを俺の首にかけ……彼は小さく囁いた。

（俺のことは良い。だけどシュリーが心配だ。見ててやってくれ）
（フォルテ？）

（俺はテレビの前じゃある程度行動制限されちまう。人形だからなだから不測の事態にしてやれることも限られている。でもお前の力なら、その不測の事態を未然に防ぐことも……出来るんだろ？）

（やろうと思えば）

（じゃあ思え。いいな）

「兄さん？」

遅れる僕らを気遣ってシュリーが後ろを振り返る。

「ああ、今行く！お前もぼさつとすんなよ」

フォルテが僕の背中をばしつと叩いた。その力強さは、本の数時間前自殺を図った少女のそれとは思えない。あれは何かの演出とか演技だったんじゃないかと思ってしまうほど、声色まで少年のそれになっている。何が何だかわからないまま僕は頷き従った。

フォルテが死ぬなら一緒に死んであげること。シュリーを守ることに。僕としたことが、こんな数時間の内に約束は二つになっていた。

*

「何そわそわしてるんだよ撫子」

「うええええ、だってだってだって大和おっ！」

仕事へ向かう途中だ。見つけて拾った車の中、めそめそと俺に抱き付いてくる俺の相方、撫子。長い黒髪、白い肌。大和撫子を体現したようなお淑やかそうな女の子。

しかし芯は強くなく、物凄く打たれ弱い。シャープペンシルの芯で例えるならこいつは6Bくらいの柔らかさ。それでも対する俺が6Hくらいでいれば二人揃ってHBにはなれるだろう。要するに俺と撫子はベストパートナーってことだ。

「だから悪かったって。ごめんな。転校初日の学校に顔出せなかったのは謝る」

俺達コンビは今全国ツアーの真っ最中。全国の学校を回って共に学生生活を共にし着実に足場を固め、ファンを増やしていくと言う計画を実行中だ。

「ううん、私の車も渋滞で遅れたから学校に顔出せなかったの。一人じゃ不安で……それで」

昨日は別番組の収録があった。本日初登校になる訪問先に、放課後だけ顔を出す事になっていたのだが……相方が泣いて俺に抱き付いて来たのだ。その頃にはもう次の仕事が迫ってきていてそっちはキャンセルになった。次の仕事は一緒だし、こうして拾ってやったんだけど……何かあったのだろうか？

「誰かに苛められたのか？」

「ううん、そうじゃなくて……学校入れなくて、引き返して、そこで同じ学校の制服の人見つけて」

「うん」

「それでその人毒のある雑草を食べようとしてたから止めたら……め、メールアドレスも知らないはずのその人から、メールが届いて！私、怖くてっ！」

「……ストーリーカー!？」

「そ、それにしても私に興味無いみたいで。私が誰かも知らないみたいで……晩飯の邪魔するなって……」

「このメールアドレス……これは酷いな。これフリーアドレスだ。おまけにそれだってちゃんと自分ので登録したか怪しいもんだ。そこから辺の相手の携帯奪って送信したとしか思えねえ」

「え？どういうこと？」

「お前の携帯、ウイルス感染してるよ。もうOSいかれてやがる」

「えええええ！どうしよう大和おっ！あれっでもしかして幽霊！

？お化けっ!？怪奇現象!？見ちゃった!？私見ちゃった!？」

「いや、撫子は靈感無いだろ。ありそうな顔してるけど皆無だろ」
「え、これって呪いじゃないの？」

「呪いでOS逝かれて堪るか。そんなことより問題はお前のスケジュールがパーってことだぜ」

「ああああああ！そ、そうだ！どうしよう！！」

「俺と一緒に奴は別に良いんだけどな。お前だけの仕事もあるだろ？だからちゃんと普通に手帳も用意しろって言っただろ」

「ちゃんと携帯と手帳の両方に書いてたんだよ！唯、手帳落としちゃっただけで……」

「お前なあ……ドジツ子じゃ済まされないうっていい加減。お前もプロなんだからしっかりしような。な？今日の所は俺の携帯貸してやるからさっさとマネージャーに連絡して予定確認すること！」

「……はい」

でもそう言う話なら話は早い。そういうのは俺の得意分野だ。

「そいつの顔くらいは覚えてるだろ？」

「うん……」

「なら次に会ったら俺がとつちめる。それで話は終わりだ」

この機械音痴に携帯持たせることはだから俺も反対してたんだ。

大抵俺が傍にいるんだから使わないだろ。そう思ったのにさ。別の仕事が出来て来たからこれを機にとかって撫子に頼まれて。いや、俺とメールするのが楽しみだったとか夢だったとか言われたら俺だって断れないわけだ。

(だからこそ犯人許せねえっ！)

俺と撫子のメールライフを僅か三日にして壊してくれるとは！どう落とし前付けてくれるんだ！俺は名も知らぬ犯人に怒りが燃えた。

絶対見つけ出してやる！

「大和？」

首を傾げて俺を覗き込んでくる相方は非常に可愛い。見た目だけなら絵に描いたような大和撫子なんだこいつは。いや、性格だって俺から見れば十分可愛いけどさ。

目を逸らしながら俺は彼女に包みを取り出した。

「それとこれ」

「え？」

「そろそろお前の誕生日だろ？今度は落とすなよ。手帳内蔵時計だ。容量、メモリも申し分ない。たっぷり仕事予定ぶっ込め。腕に付けてりゃ流石に落とさないだろ」

「大和！ありがとっ！大好きっ！」

手作りの時計だが、思いの外喜んでくれたみたいだ。前に一緒に出掛けた先でこいつが見ていた時計。それを買って分解。中身をもっと実用的に作り替えた代物だ。超小型PC、劣化携帯と呼んでも良い位にはハイテクだ。いや劣化させなくても良かったんだけど、そうしないとこいつ壊しそうだと思って予め機能を制限して作っておいて正解だった。

「OSは俺の作ったオリジナルだ。そんじょそこの奴には破れない。ネットには繋いでないからウイルスに冒されることもない。文章の打ち込みは出来るし赤外線で俺の時計と携帯とはやり取りできる。俺の携帯経由でならメールも出来る。新しい携帯買うまでこれで我慢しろ。何かあったら俺が代わりに聞いておいてやるから」

「うん、ありがと大和……」

「撫子、気を抜くなよ。ここ最近の緊張感は何かある。何時仕掛

けてくるか。いや、これだって何者かからの先手なのかも知れないんだ」

「俺達は、俺達の背負ってる物を忘れちゃならない」

「うん、解ってる。二人で頑張ってる……」

(この国を取り戻すんだよね、大和?)

(ああ)

盗聴があるかも知れない。迂闊なことは話せない。それでも視線で言いたいことが解り合える。共に目指す夢は同じだ。

この国から奪われた全てをここに取り戻す。目的のために手段は選ばない。今はどこぞの犬だの手先だなんだ呼ばれても、俺達には夢がある。愛する祖国のためならば、甘んじて汚名も受けよう。

(もうすぐだ……もう少しなんだ)

開戦の狼煙は間もなく上がる。その時まで如何に上手く立ち回ることが鍵。

それまで付き合ってるうじじゃないか。この下らないお人形ごっこにな。

*

僕、
イリヤ . スネゲーラチカ

には困った悩みがあった。

「ラズイー姉さん、カチユーシヤ、早く着替えて。仕事に遅れるますよ?」

「嫌」「嫌ったら嫌!」

雪の中から生まれたお姫様みたいだなんて形容されてる姉さん達も、その私生活知ってる僕からしたら悪魔みたいなものですよ。

もうすぐ仕事だって言うのに、まだ部屋着のまま二人揃ってそっぽ向く。もう本当にこの人達はどうしよう。

ローザ姉さんとエカテリーナ。二人とも性格は全然違うのに、困った共通点が一つある。

「イーリヤ！私のことはローザ リーズ リゼットと呼びなさい！愛称ならばゼーシャ姉さんでよし！」

「イーリヤ兄様、私はジゼル！愛称でゼーリヤ！」

大人びた方の女の子がローザ姉さん。僕より年下に見えるのがエカテリーナ姉さん。でも設定上、エカテリーナ姉さんは僕らの妹と言うことになっている。オフの時から彼女を妹扱いする癖を付けていないと仕事の時にやらかしてしまう可能性もある。だから僕は常に彼女を妹と呼び、彼女は僕を兄と呼ぶ。この辺はちゃんと彼女もプロなんだけども……

「いや、カチューシャの方は元の名前が微塵にも残ってないんじゃない……？」

「死んだ男を思って一生暮らすより若い内に死んで、恋人が浮気したら殺しに来るような、それでも絆されて見逃してあげるような悲しくも可愛らしい女に私はなりたいのです兄様」

「そ………そうなんだーすごいなー」

僕の姉さんと妹は、バレエが大好きだ。踊るのが苦手な僕は歌の仕事の方が嬉しいんだけどな。だって白タイツって恥ずかしいよ。僕も思春期なわけだから、白タイツには抵抗あるよ。まだ僕も女装しろとか言われた方が衣装で隠せて有り難いよ。

そういうわけで僕は歌の仕事が大好きです。でも姉さん達はそう

じゃないみたい。

妹の方はこの間演じた劇に随分と感銘を受けたみたいで今の名前を捨てそうな勢いだ。そんなことしたらファンの皆さんに申し訳が立たないじゃないかって言っても駄目だなこの子は。

(……はあ。『カチューシャ』か『エカテリーナ』ってタイトルのバレエでも書いてあげるかな。作曲もして。それでこの子が好きそうなる展開の奴で)

じゃなきゃ本当に改名しかねないこの子なら。溜息ながら視線を逸らし、その先で姉さんと目があつた。リゼットってこっちはこつちで、この間演じた娘役に酔ってしまつたらしく恋と結婚に憧れ出した。そりゃあ僕らはプライベートまで管理された生活しているんだから、そういう事柄とは縁遠い生活だよ。スキャンダル一つが国際情勢に関わるんだ。基本僕ら音楽に関わる人間は聖職者になつて修道院入りした気分です仕事に臨まなければ痛い目を見る。

「何？イーリヤ？」

「いや、姉さんまだ若いんだしそんなにガツガツしなくても」

「イーリヤ！そこに座りなさい」

「はい」

「良いですか？女の一生は長く、そして短い！儂いものなのです！故に私は10代の内に結婚したい！タイムリミットまであと何年だと思つて居るのですか貴方は！」

「まだ四年、誕生日が来てもまだ三年あるじゃないですか」

「お黙りっ！四年も三年もあつという間です！こんな下らない会話に私を付き合わせて！もう何秒浪費したと思つているの？行き遅れたらどうしてくれるんです！責任取つて貴方が娶つてくれるんですか！？」

姉さんが僕に座れって言ったのに姉さん酷い。

「でもほら姉さんだって人気あるじゃないですか！あっちこっちから姉さんを嫁にしたいっていう声も聞こえて……」

「お黙りなさいっ！私にも選ぶ権利という物があるのですよ！最低ラインがイーリヤ！貴方です」

本当この人どうしようもなく面倒臭い。そういう中途半端なブラコン止めて下さいよ本当。もう少し僕を労って下さいよ本当に愛しているなら。

「私と結婚したくなければいい男の一人や二人姉のために見繕ってくるのです！いいですね！今日のイベントの終わりまでに連れてこなければ……ふふふふふふおほほほほほ」

「な、何をするんですか姉さんっ!？」

「貴方の部屋にある古今東西マトリョーシカコレクションの頭と胴体があっちこっち他のセットの人形と入れ代わります。あれを元通りにするのは並大抵の労力ではありませんよ！おほほほほっ！さあ、イーリヤ！働け！働くのです！この私のために！」

姉さんの高笑いに僕もいい加減げんなりしてくる。この二人の相手をしろってだけで僕は胃が痛いのに。もし僕が将来禿げたら姉さんとカチューシャの所為だ。

……とは言ってもだ。方向性の違いはどうしようもない。今回のツアーはそういうのじゃないんだから。二人ともプロならその辺腹をくくって欲しい。三強の一勢力がこれじゃあ三下相手にだって足下掬われる。ここはアウエイの土地だ。僕らに分があると思って掛かったらそれは絶対結果に響く。もういっそ丸めて二人揃えて脳味噌ゼリーコンビとか呼んじや駄目なんだろうか。駄目なんだろうかね。そんなこと言ったらこっちがどうなることやら。

「あのさ、この仕事を終えたらバレエのツアーでも何でも組んでくれるって話だったじゃないですか。これも仕事だよ。頑張ろうよ、ね？カチューシャ、ラズイー姉さん！この国での仕事が終わったら新しいバレエのための衣装作り、僕も協力するからさ」

「……仕方ありませんね。此方に滞在中に良い感じの男性を何人か見つけてきてくれるだけで許してあげましょう」

「私にはこの国のバレエの本。それが無いなら題材として使えそうな伝承、童話の本を買ってきて下さい兄様」

おのれ。腐っても姉か。妹の皮を被った姉まで便乗して来た。姉弟ってどうしてこうなのさ！もし生まれ変わるなら僕は、今度は兄という生き物に生まれたい！そして妹や弟を扱き使ってやるんだから！奴隷のように！馬車馬のようにっ！ボ口雑巾のようにっ！

「仕事までには帰ってくるんですよ」

「いつてらっしやい兄様」

「今行かせる気ですか！？」

「お行きなさい、馬車馬のように！」

「いつてらっしやい、馬車馬の如く！」

姉さんが御者。カチューシャが馬車。そんでもって僕が馬だと彼女たちは言わんばかりの表情だ。泣いても、いいよね……僕。

*

「それにしても……これはいくら何でも」

今夜のイベントというのは些か酷い。

「合同ライブなんです」

シユリーは優しく微笑むけれど、これって……

「敵陣真つ直中の戦場じゃないか」

「ぶるってんのかよ。こう見えても俺とシユリーは三強楽団。この遠征にはるばる国境越えて旅してついて来てくれた信者ファンも多いんだぜ？三分の一……までは行かないだろうがこの会場の五分の一は俺達のファンだと思ってくれて良い」

「なるほど。つまり五分の四は敵ってことか」

片足折れた男に護衛をやれだなんてまったく酷い話があったものだ。溜息ながら松葉杖と足に視線を落とす、その途中でシユリーと目が合った。

「あの、痛くないですか？」

「うん、まあ痛いけど……その内治るよ。僕は運は悪いけど、身体は丈夫なんだか割とすぐ治るんだ」

「カルシウムをしっかりと摂ってらっしゃるんですね」

「そういうことにしておいて」

丈夫な身体の所為で、何度自殺に失敗したか。死ねもせず痛いだけ痛いなんてまったくやってられないよ。

「まあ、怪我人相手なら敵も油断するだろうさ。しっかりとやれよ
女中野郎」

フォルテは僕に素っ気ない。ビルの屋上で会った時はもう少し可愛げがあったような気がするのに。

「行くぞ、シュトラーク」
「え？」

車から降りたフォルテは、道にいる得体の知れない怪しげな老人に声をかける。今時珍しい手回しオルガン。

「す、ストリートオルガン……」

初めて見た。おおと覗き込んで見ているとそれを操る初老の紳士がにたりと笑った。何故か本能的にこいつはやばいと思った。

「人攫いっぽくないあの。敵じゃないの？」

「彼はライター。苗字はシュトラーク。私達に仕えてくれている執事です。例のビルを調べてきてくれた人です。こう見えても有能ですしとても頼りになる人なんです」

「へ、へえ……」

こう見えて、と前置きする辺り……シュリーも薄々そう思ってたんだね。

「遅かったじゃないかシュトラーク」

「すみませんねえ坊ちゃん。この国はよそ者に厳しい。職質に遭っていたらこんな時間になりました」

そりゃあされるわこんな怪しげなおっさん見かけたら。大体名前がライターって。普通にそれ聞いてストリートオルガンの事だっと思わないだろう。横文字に弱い警官がライターって聞き間違えたんだ。嘔吐きつて名乗ったと思われたらそりゃあ交番に連れて行かれるよ。

「まあ……それではやはりあの付近には敵の目もあつたのですね。ライアーを通報したのもその者でしょう」

シュリーがそれっぽい考察をしているけれど、どこまで本当なんだか。

「さあさ、お嬢様もお急ぎ下さい。護衛はこのライアーめが引き受けました」

「あ」

ガラガラと手押し車に双子を乗せて風のように去っていく老人は客観的に見ると人攫いだ。

「ストリートオルガンって何百万つてするんじゃないっけ……?」

あんな風に扱って良いんだろうか。瞬く間に遠離り見えなくなつた三人に、僕はどうしたものかと頭を掻いた。

こんな足で歩き回らせるとはなんたる非道。

(でもまあ……)

部屋を貸して貰つたんだ。面倒臭いが働かねばなるまい。約束もしてしまった。

とりあえず僕もカードを使って会場入りするか。そう思って歩き始めた時、肩を叩かれた。

「なんだよ、結局お前来てたの? お前誘つた連中断られたつてばやいてたぜ? でもそっかーお前もか。解る解る。ツンデレって奴だな」

「……誰？」

「同じクラスの田中だろ！いい加減覚えろ！……っーかどしたのその足」

「折った」

「いや、まあ……折れてるな」

「じゃ」

「いや、おい、待てよ。じゃ。じゃないだろ！会場入り口はそっちじゃないだろ」

「……バイト」

「は？」

「僕関係者だから。じゃ」

「は!?!」

松葉杖と無事な片足ですたすたと歩き出した僕。遅れて全力疾走で追いかけてくるクラスメイトA（自称）。

「まだ何か用？クラスメイトAさん」

「いや、俺そんな名前じゃないから！覚える気が無いにも程があるだろ……ってそうじゃなくて！関係者ってマジかよ!?!」

あまり詳しい話を言うのは面倒事に繋がりそうだ。適当に流しておくか。

「ここの掃除任されてるんだ」

「あ、このドームでバイトしてたのか。役得だなおい」

別に嘘は言っていない。曖昧に言っただけ。騙される方が悪い。

「あ、あのさ！本当頼むっ！出来たらで良いんだ！出来なくても責めないからっ！サイン貰って来てくれよ」

「誰の？」

「『folklore』の歌姫、二胡ちゃんアルフのサイン貰ってきてっ！」

「誰それ」

「ちよっ、おま！二胡ちゃん知らねえの！？にこちゃんっていう愛称も知らないの！？あのチャイナドレスのほら！スリット生足美人の子だよ！！」

「だってあのグループ沢山居過ぎて何が何だか誰が誰だか」

「よく真ん中にいる子だよ！人気投票で一番人気の！」

そんなこと言われても。女の子って一定人数集まるとみんな同じ顔に見える生き物じゃないか。メイクとかそんなに変わらないし。僕の記憶に残りたかつたら顔面ペインティングでもしてきて貰わないと。赤とか青とか目立つ色の。

「面倒臭いからパス」

安請け合いは基本的にはあんまりしない。それでなくとも今日は約束を二つもしてしまった。これ以上の面倒事は御免だと、僕は関係者入り口へと急ぐ。鈴木だか佐藤だか渡辺だかは僕に追い縋って来たけど、まもなく引き剥がされるだろう。

入り口まで行くと、警備員達人ばかりが出来ている。何事だろうかと覗き込むと、怒っている少年が居た。

「偽のカードキーを持って来る以上、本人とは認められん」

「だから、これは手違いで……他の何か……音声、指紋照合でも何でもやりますから通して下さい！早く行かないと時間に間に合わなくなる！そうなって困るのはあなた方なんですよ？！僕は子供ですが歴とした外交カードの一枚なんです！」

雪みたいに綺麗に光るプラチナブロードのその子は僕より年下だ。14、5くらいだろうか。それにしてもはしつかりとした口調で話している。

「おい、あれって」トロイカ？ 『のイリヤじゃないのか？』

「すみません、僕も仕事なんで通して貰えますか？」

壁にカードキーを叩き付けると扉が開いた。その隙に少年が扉の中へと飛び込んだ。それに続こうとした高橋だか山本だかが今度は警備員に取り押さえられていた。当然僕も文句を言われたが、僕のカードに警備員はすくすくこと下がっていった。

「じゃあね山下」

「田中だつて言つてんだろ！？」

クラスメイトに手を振りながら、僕も会場入り。しばらく歩くと僕を待っていたのか先程の少年が居た。

「さつきはありがとございました」

「別に。僕も仕事があつただけだしちゃんと警備できなかった人が悪い。僕も君も悪くない。君を取り押さえるのは別に僕の仕事じゃないし、面倒臭い」

「あの人達みたいに僕が偽者だとか思わないんですか？」

「仮にそうだとしてもそれは僕の仕事じゃない」

流暢な言葉遣い。あの双子同様、この子が本物だつて証拠だ。少なくともこの子はこの国の土俵に立つて来ている。

ていうか僕、二カ国語しか無理。おまけに読めても母国語以外は話せない。知ってる言葉じゃなかったら声をかけられても無視していただろう。それでも異国語覚える手間までかけて面倒臭いながら

話しかけてきてくれたんだ。労力は買っよ。

「じゃ、僕はこれで」

松葉杖をついて歩き出した僕の後ろでさっきの少年が何やら話しかけられているようだ。

「あら、遅かったじゃないですかイーリヤ」

警備員かと振り向けばそうじゃない。彼に似た雰囲気の子が二人いた。背が高いのと小さいの。二人とも軍服だ。あれが三強の一角か。

「ラズイー姉さん……なんなのさこれ。姉さんがくれたカードキー！通して貰えなくて大変だったんですけどっ！」

「あら、私としたことが。ポイントカードと間違えていました」

「姉さん……わざと？僕はてっきり何者かにすられて別の物と変えられたのかと……こんな手の込んだことして……」

「読めない貴方が悪いのですイーリヤ。男性は修羅場をかいくぐってこそたくましく成長するのではないかと言う姉心、痛み入りましたか？」

「痛み入る通り越して痛いです。大体姉さんだって読めるけど書けないじゃないですか！」

「あら、だって嫌がらせのように文字が沢山あるではありませんの。あれ全部覚えると言うのは酷な話。この国の人々だって常用漢字以外は書けないそうではないですか。読めれば十分です」

何やら言いくるめられている。特別助ける義理もないか。あれが向こうの家族というものの会話なのかも知れない。

これ以上向こうに構ってもいられない。僕はヘッドフォンを装着

し、外部音と遮断する。それと同時に携帯電話を弄り、この建物内のハッキングを開始。あの二人を狙う奴がいないかを確かめる。

「兄様、ジューズ買って来てくれた？それじゃあコップに注いでくださらない？」

「はいはい、わかったよカチューシャ」

「まあ！姉妹差別ですの？カチューシャにあつて私に土産が無いんですか！？良さそうな男は見つかったんです？優しくて豊かでそれでいて夜は」

「金持ちかどうかは知りませんが、親切な人ならいましたよ」

「まあ、何処に！？」

「あの人」

外部音の遮断とは言っても、完全には防げない。だからそれはうつすら僕の耳へと届く。

何か白羽の矢が飛んで来た。逃げなければならぬ気がする。これ以上の厄介事は御免だ。

僕は松葉杖で跳ねた。後は全力で走る。何も聞こえない。音楽でノリノリになつて何も聞こえないけどテンション上がって走っている。そんな人間を演じるため、適当に頭を振り乱しながら僕は駆けだ。当然前など見えない。結果として何度目かの角を曲がったとき、向こうから来た人にぶつかる。

「悪い、大丈夫か？」

僕が怪我人だと気付いたその人は僕を起こしてくれた。が、ちょっと怒つたような顔つきでちゃんと注意もする。

「よくわからんがあんまりバックヤードではしゃぐな。怪我人にしてはなかなか見事なヘドバンだったが……」

見かけはチャラチャラした兄ちゃんだけど意外と真面目そうな目をしていた。僕が内心感心していると、その兄ちゃんは何事かに思い至ったかのように手を打った。

「お前その鞆からはみ出てるの色紙だな。俺のファンか」

「え？」

ていうか誰？とか言ったら流石にあれか。今日はその言葉で怒りを買ったことを思い出す。

でも僕何時色紙なんか鞆に入れた？さてはあの村上だかが僕の鞆に潜り込ませたな。それにしてもこの人目敏いな。

「最近忙しくてファンサービスもままならねえ。俺の関心を引き付けるためにインパクトある行動をしたってわけか。気持ちは解るが他の人にぶつかったら迷惑だろ？ほら、サインはくれてやるからもうこんなこと止めるんだ。いいな？」

「え、あ、はい」

「よし！解ればいい」

軽く手を振って、ギターケースを抱えた兄ちゃんは消えていった。残された色紙には何やら荒々しい文字が刻まれている。

「……………読めない」

何語、これ？あの人のこの国の言葉べらべら喋ってたけど髪の色はこの国のじゃないし。染めてた？地毛？よくわからない。

このサインにしたって文字と言っより象形文字だ。ていうか絵だ。

(フォークロアの子のサインって事にして藤原に渡しておくか)

いや、そもそも僕鈴木の顔覚えてないや。渡せないかもなこれ。第一もう、あの学校行かないと思うし。

とりあえず貰った物だ。捨てたら悪いかもしれない。鞆にそれをしまい込み、僕は階段を上る。ステージが見える場所に行きたい。機械室、放送室が見える場所が良い。ステージをよく見渡せる場所。怪しい場所を巡って、仕掛けを施していく。

今日のイベントは、歌の祭典なんちゃらライブとかで内外問わずそれぞれの派閥が集まるような思惑渦巻くイベントだ。

フォルテの心を抉り、シユリーの部屋を盗撮した奴。絶対ここにも現れる。他国への遠征は危険が伴う。アウェイでの戦闘。護衛全てを連れて行くことが出来ないから隙が生まれる。敵の勢力はそれぞれ、お飾りである歌歌い達を始末したいと思っている。また新しい駒を育てる時間はない。だから絶対に失ってはならない人形。それに害為せば、他国での地位や富を約束されるとも言える。

だからあの子達の命を狙うのは、何も他の音楽家の狂信者達だけではない。金目当て、後ろ盾欲しさにそういうことをする連中だっ
ていないわけじゃない。

そう言う奴は、歌に魅せられていない奴に多いと思う。それなら僕なんか二人に疑われて当然だ。

(それでもフォルテとシユリーは、僕を抱え込んだ)

約束をした。だから守らなければならない。

決意も新たに僕は僕の仕事の進み具合を確かめる。僕が陣取った場所は何、唯の医務室だ。具合が悪い振りをしてベッドを借りてカーテンを閉める。よもや敵も敵がこんなにごろごろ寛いでいるとは思うまい。だってこんな所にいたら護衛も糞もあるか。助けに行くのに時間が掛かる。だからこそこんな所にいるとは思わない。それでも約束した以上、二人のことはちゃんと守る。

僕の携帯電話はほぼPC。どうせ話す相手も話したい相手もない。電話機能を取り除き、その分色々詰め込んで超小型PCとして改造した。監視カメラの情報はこの携帯で見ているが、小さい画面では足りない。いつか何かの役に立つかもと作っていた、昼寝用のサンングラス型モニターを改造し作ったコンタクトレンズ型モニターを起動。それを複眼モードに切り換えて、監視カメラを掌握。

怪しい人物がいればすぐに解る。あの二人を見張るカメラ。あの二人を撃ち殺せる距離にあるカメラ、舞台照明に攻撃を仕掛けられる位置のカメラ。僕の仕掛けた仕掛けを見張るために僕が取り付けたカメラ。仕掛けをするときは監視カメラを切り換えて僕の姿は映らないように弄っておいた。何の問題もない。ああ、そうそう。後は万が一あのオルガン爺が敵だったときのことも考えて、その注意も怠らない。

(敵には僕みたいなタイプの奴がいないのかな、少なくとも遠征には来ていない?)

世界レベルのハッカーが出てきたら僕だって楽に仕事は出来ない。僕が存在がバレてしまえば余所からもそういう連中が出てくる。あくまで僕は目立たず気付かれないようにしないと。いや、それを言うならあの貸家の仕掛けを壊した時点でバレてるか。参ったな。僕がそれを思い出したとき、ヘッドフォンから警告音。

(来た、か)

僕以外の侵入経路を見つけた。中々やる。でも僕が変えたパスワードはまだわからないらしい。破られるのも時間の問題。でもこのアドレスは携帯だ。なら、携帯からじゃ簡単には打ち込めない文字の羅列にしてしまおう。よし、やった!逃げたか。

額の汗を拭い、僕はほっと息を吐く。

詰まるところあれだ。僕は運が悪いが運が良い。全ての幸運をこのハッキングに費やしてしまっているのではないかというくらいこの道とは相性が良い。それ以外のことは本当に駄目だ。ろくでもない人生だ。唯一無二のろくでもない特技を必要とされたんだ。

(面倒臭いけど、負けるわけにはいかないんだ)

「……って、あれ？このアドレス……」

侵入を諦めた者のアドレスは見覚えがあった。

*

「くそっ！やられたっ！」

俺の携帯は撫子に貸している。俺の手元にあるのは撫子の携帯。ちよつと弄って直せば会場の警備の確認をするくらいは出来ると思った。だけど……

(先客が居るなんて聞いてない！)

撫子の携帯は当然普通の携帯だ。パスワードで普通に打ち込もうとして打ち込めない記号や文字がある。ならそれはネットに繋いでコピペでもして来た方が早い。だけど時間が掛かる！解析は出来たのに！でもこれを越えてもまたその繰り返しだろどうせ。こっちの足下見られてる。

「大和？そろそろスタンバイだっつて」

「くそっ……時間切れか」

仕方ないので腹いせに罵詈雑言を打ち込んで送信。

「うわっ!」

「きゃああああ!」

俺と一緒に画面を覗き込んでいた撫子も悲鳴を上げる。抱き付かれた。ちよつと嬉し……がつてる場合じゃないだろ!

「あ、悪趣味」

「や、やつぱり呪いなんだよこれええええ!」

画面に映し出されたのは精神ブラクラ。如何にもな心霊写真とグロ画像。携帯からはお経とうめき声の音声サービス。撫子じゃないがこれは心霊現象だと逃げたくもなる。

「最近の幽霊はこんなハイテクなのかよ」

「大和、もしかして?本物……?」

「これは違う。でも……勘だ」

「巫女さんの勘?」

「まあな」

恥ずかしいが俺の実家は神社。言うなれば俺は巫女だ。そういう属性は撫子だったら似合うのに、撫子は普通の庶民の娘だ。俺なんか巫女服着ても誰得だって話。野郎の制服着てた方がよっぽどウケが良い。

「……ちよつと妖気がしたんだよ。どこの陣営の奴か知らないけど、これだけ人種坩堝な音楽パーティ。そうというのが紛れ込んでも不思議じゃない」

「ひいひい！嫌だ、怖がらせないでよ！」

撫子は涙目だ。可愛い。俺のささくれた心が幾分か癒された。

「とりあえず気を引き締めていこうぜ。雑草ハツカーにオカルトハツカー少なくとも二人は得体の知れない敵がいる」

「……うん」

「撫子、お前に何かあったら大事だ。俺から離れるな、いいな？」

「解った、大和。……大和？」

「い、いや、何でもない」

ぎゅっと腕にしがみついてくる相方は本当に可愛い。ああ、もうくそっ！どうしてくれよう！嫁に来いって叫びたいくらいに可愛らしさだ。

(……にしても)

ステージへの道すがら、俺は考える。

(あんな妖気、この国じゃ感じたことがない)

外来産の幽霊か？いやもつとあれはおどろおどろしい。“悪魔”だなんて可愛らしいもんじゃねえのは確かだ。

「……本当だ、大和。ここ会場何か悪い噂でもあるのかも」

「え？」

撫子が指差す方向。壁にお札が貼られていた。しかも割と古びた歴史を感じさせるような……

「迂闊に触るなよ撫子。害があるようなものなら俺が、出演終わってから始末する」

「今は時間がないもんね。解った」

*

“でもカラストロ様、今度はどんな人間に転生なさってるのかな”

“契約でも出来たら魂ゲットでいきなり下克上出来るのに、居場所が掴めないとすると痛いったらないわ”

“イストなら知ってるんじゃない？”

“トリア？あははははは！冗談じゃないわ！この前遊びに行ったら夕飯にタワシ出されたわよ。どっかの世界で見た食べ物だって”

“食べたの？”

“カレーは偉大よ。あれにこそ魔力の宿ったものだわ！あれかければ大抵のものを食べるもの！”

“それはティモが激辛好き過ぎて味覚おかしくなってるだけじゃないのかな。タワシ食べる痛さと香辛料の辛さの痛さで痛覚麻痺みたいなの。僕は甘口じゃないのをカレーとは認めないんだからね”

本の中に閉じこめたわけではないけれど、場面転換で他の領地の様子が映るのは、これが第二領主に関係する物語だからだろう。全く本の中の第二領主が羨ましい！ハッキングですって！？私なんか使い魔を領地の外に出すことも出来ないのに！眷属達だって離れ離れの子多いのに！

(今に見てらっしゃい！)

この飯はいずれ返してやるわ。とりあえず本に映る同僚二人のことで、私は夕飯を運んできた使い魔に向かって微笑んだ。

「使い魔、この間第五領主に出したご馳走、好評だったみたいよ？今度からモリアにはあれでいいわ。第四領主には激辛を。まあ、彼は滅多なことではうちに遊びに来ないでしょうけど来たらそうしてあげなさい。この私に観察されているとも知らずに自ら弱点をさらけ出すなんてまだまだお子様ねあの子達は」

「畏まりました。ご友人、同僚に対しても鬼畜でいらつしゃるとはさすがはお嬢様」

「そりゃあ私も悪魔だもの。当然よ。ていうか今日はカレーなのね」

「はい。俺も本の展開が気になりましたので凝った料理をする気になれず」

「私にまでタワシ出したら殺すわよ」

「お嬢様、失礼します」

「何？空気の入れ換え？」

「どつせえええええええええええええええええい！！！！」

「あ！今あんたタワシ投げたでしょ！？服の袖から投げたでしょ！！最低っ！やる気だったわね！！」

2：夕暮れ夜へのストリート（後書き）

悪魔視点 本の中の物語（何度か視点変わる） 悪魔視点。

これがこの話の各話構成になります。

手回しオルガンって素敵ですよ。でも値段調べて凄く驚いた。高
いんだなあ……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4810ba/>

悪魔の脚本『終末のカタストロフ』

2012年1月14日03時49分発行